樺太探訪

田中　了　陸自80

はじめに

私は日本に縁のある土地を探訪することを緩いライフワークとしている。今まで、韓国、北マリアナ諸島、パラオ、台湾と回ったが、平成30年8月、南樺太を訪問した。以下、地名は原則日本名で表記する。

樺太島及び全千島を含むサハリン州は、人口が約50万人、約9割がいわゆるロシア人、約1割が韓国・朝鮮系ロシア人（ただし、大半はロシア語のネイティブ）、少数民族、日本人の住民は現在ほとんどなく、ビジネス関連で数千人程度である。

言葉の表示はほぼロシア語だけで、英語の表示もほとんど見られない。会話と同様でロシア語以外はほぼ通じない。今回は、ガイド（通訳）の方をお願いした。キリル文字が読めることは少々役立った。

明治38年のポーツマス条約により、日本は北海道の約半分もの広さを有する一方、鉄道の一つも開通していない実質的に未開発の地である樺太を得た。それから40年間、人口、産業、インフラストラクチャー共に躍進し、当時の日本の製紙は80％までが樺太産となる。昭和20年、突然ソ連からの攻撃を受け占領されてしまう。その中で第5方面軍（樋口季一郎中将）の活躍は占領前後の日本への影響を含め忘れることはできない。

私は、当時内地として扱われていたこの地を訪れてみたいという考えを以前から持っていた。

同世代のガイドのW氏は、樺太の国境警備隊勤務中に日本語を覚えたらしい。達者な日本語と深い知識で非常に助けとなった。歴史観についての相違は種々あったが、「今のロシアは当時と異なり歴史的文化財を大切にしている」との発言は私も現地で感じることができた。樺太に関しては、日本時代と日本人の活躍があったことを隠してはいない。

1　豊原

樺太の中心的都市で人口約20万人の小奇麗な街である。道路は日本の札幌のような碁盤目状の街並みである。全体としてはほぼロシア様式の街並みになっており、ガイドに教えてもらわないと日本時代の建造物も確認が困難となっている。唯一は第88師団司令部（写真1）として知られる建物で、日本時代に博物館として建造され、昭和20年に第88師団の司令部となり、ソ連軍の使用後、現在はサハリン州博物館となっており、現在も市内の名物建造物として活用されている。また、市内には立派な在郷軍人会館（隊友会に相当？）があることが印象的であった。

写真１　旧第88師団司令部

2　国境

バスで北緯50度近くの敷香（大鵬の出身地として知られる）に移動し、翌日100キロ強の道を経て、旧国境に到着した。日本時代の軍用道路を舗装したものであるが、快適な道となっている。道の両脇には、トーチカの跡が認められる。北緯50度線では、道路沿いにソ連時代の記念碑があったが、そこから50メートルほど中に入ると国境に四基あった日露国境標石のうち一基の台座がそのまま残っている（写真2）。

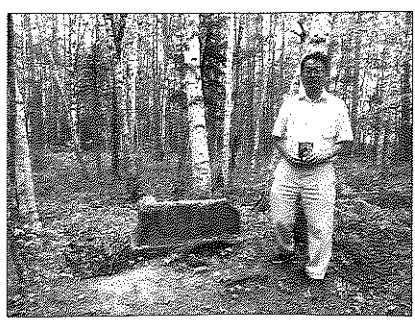
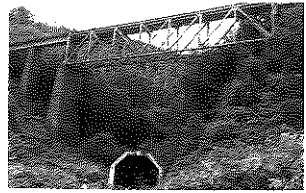


写真２　北緯50度

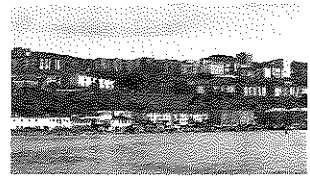
3　その他の訪問地

この他、熊笹峠（真岡、豊原間の昭和20年8月の激戦地）、真岡市内（真岡郵便電信局事件で有名）、宝台ループ橋（廃線鉄道マニア垂涎の秘境）、大泊（稚内との間に国鉄の連絡船があった港）、川上炭鉱（当時の日本で初めての恐竜が発見された）等を訪れた。

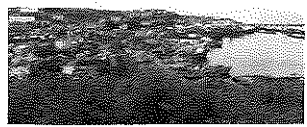
（熊笹峠）



（宝台ループ橋）



（真岡市内）



（大泊）

各所に1945年を示す表示、戦車、砲などが展示されており、戦争の結果樺太を回復したとの主張が見えてくる。この点については、ガイド氏とは議論しなかった。その他、鉄道は日本狭軌（1067ミリメートル）であったが、この数年でロシア広軌（1520ミリメートル）に改軌すべく工事中だった。そのため、乗り鉄はできなかった。

4　帰路の豊原空港

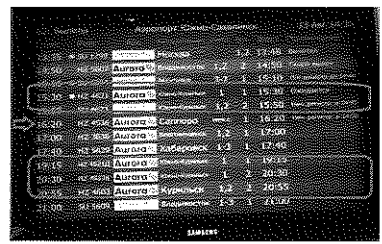


写真３　豊原空港時刻表

豊原空港のロビーの飛行機時刻表（写真３）には、国内線として国後島や択捉島行の路線が表示されていたのが印象的だった。

北緯50度（写真２）で携行している図書は、中山隆志先生（陸自58）の『一九四五年夏 最後の日ソ戦』で著者から頂いたもの。今回の探訪に関して歴史、地理、軍事面について大いに参考となった。今回、リニューアル版が出たが、ウクライナ紛争の現在にもタイムリーな書だと思う。

最後に、現在の樺太は住人、経済の関係から中国、南北朝鮮と関係が深い。日本との関係が疎遠なままでは、今後、実質的に中国、韓国の傘下に入ってしまうのではないかとのかすかな懸念を感じた。